犬のいない家

にれけいすけ　油野誠一絵

現代子ども文学選 13

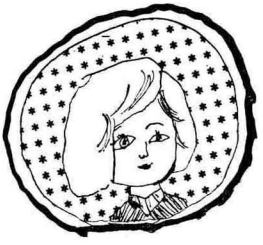
犬のいない家

にれ けいすけ＝作
油野誠一＝絵

あかね書房

犬のいない家

現代子ども文学選 13



＊著　者

にれ　けいすけ

＊発行者

岡 本 陸 人

＊印　刷

新興印刷製本株式会社

錦明印刷株式会社（オフセット）

＊製　本

中村製本株式会社

＊発行所

株式会社　**あかね書房**

東京都千代田区西神田３－２－１　〒101

電話　東京　263－0６４１（代）

1972年５月30日発行

NDC　913　　8393－14513－0027

にれ　けいすけ

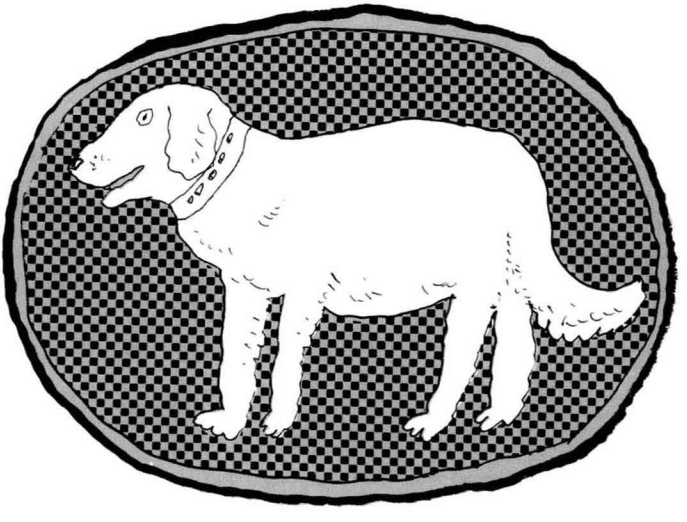
犬のいない家

あかね書房　1972

133p　22cm（現代子ども文学選13）

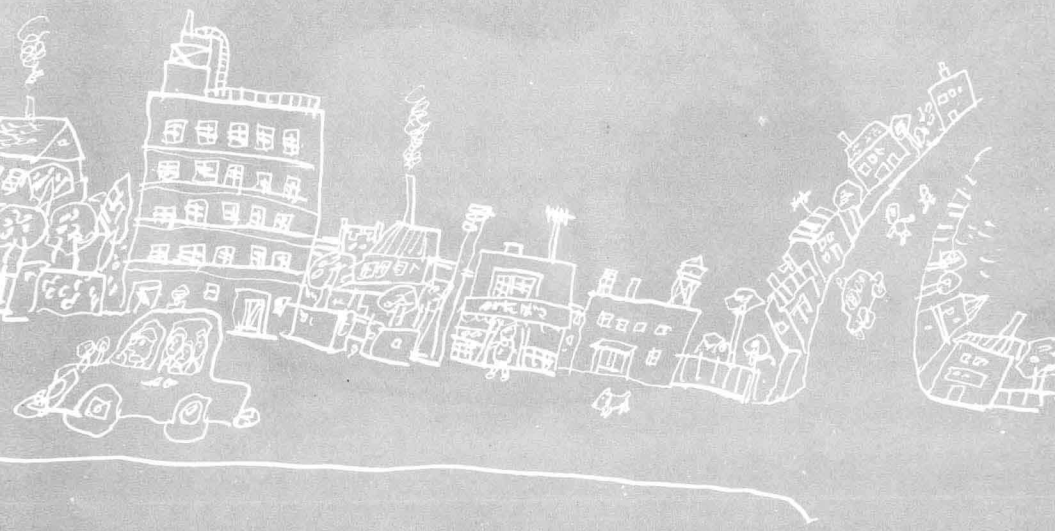
©1972 Printed in Japan 著者との契約により検印なし

おかあさんといっしょに、はじめて
おじさまの家にいくのです。
おにいさんがいるそうです。
大きな犬がいるそうです。
どんな家かしら？
うれしいけれど、すこししんぱい——



もくじ

サン・ベルナール……6
おじさまの家……24
手術……39
お夕飯……60



犬小屋……75
カニクイザル……96
ベル運転手……111
あとがき……132

そうてい・さしえ／油野誠一

■著者紹介＝にれけいすけ

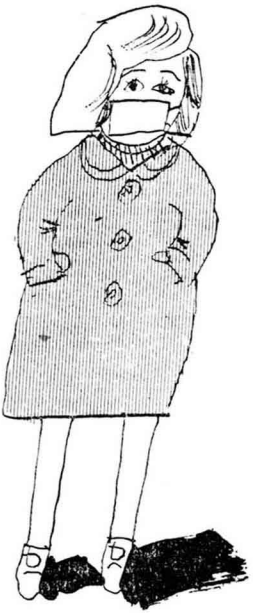
一八九八年東京に生まれる。立教大学文学部卒業。聖公会司祭。戦後、京都市交響楽団初代事務長。一九六一年ヨーロッパ巡遊。一九六六年退職。以来、文筆に親しむ。児童文学の著書に『ヒッキーと三平とチロ』がある。

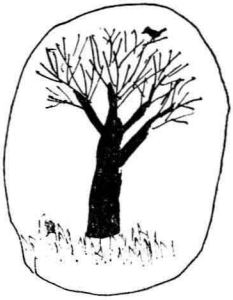
■画家紹介＝油野誠一（ゆのせいいち）

一九一二年大分県に生まれる。早稲田第二高等学院中退。油絵制作のかたわら主として児童図書の挿画、絵本等の仕事をする。主な出版物に『くまさぶろう』『おんどりのねがい』がある。第三回野間児童出版文化賞受賞。

犬のいない家

*にれけいすけ





サン・ベルナール

おじさまは、東京へくるたびにうちによるので、よく知っています。あたしのおとうさんの、たったひとりのおにいさんで、おもしろい、とてもいいおじさまです。

おばさまとは、二度あっただけですが、よく顔をおぼえています。けれど、幹夫おにいさんだけは、こんど四年になるのだそうですが、どんな子だか知りません。

写真は、なんべんも見ています。こんども、わざわざアルバムをだして、よく見てきました。ですから、目をつぶっても見えるくらい、よくおぼえています。けれど、あうのははじめてです。

あたしは、すこししんぱいになりました。でも、おじさまの子ですから、いい子にきまっているでしょうし、それに、もうすぐあえるのですから、かんがえることなどやめにしました。

幹夫おにいさんのところには、大きな犬がいます。その犬が、幹夫おにいさんといっしょに、写真にうつっていました。幹夫おにいさんはにこにこしていました。犬もうれしそうに、したをだしてわらっているように見えました。

サン・ベルナールという種類の犬で、アルプスの雪にうもれた人をたすけだしてくれるのだと、おとうさんがおしえてくれました。たいそうおとなしい、いい犬だということですが、あたしがいったら、ほえないでしょうか？　あたしとも、なかよしになってくれるでしょうか？　幹夫おにいさんは、毎日学校へいかなければなりません。そのあいだ、犬

はあたしと遊んでくれるでしょうか？　もしそうでないと、あたしはひとりぼっちで、さびしいです。

けれど、その犬とも、もうすぐあえるのですから、しんぱいするのをやめました。

百日ゼキという病気は、ほんとにいやな病気です。ちょっとうごいても、すぐセキがでて、でたら、なかなかとまりません。くるしいから、でそうになると、がまんします。そうすると、かえってよけいにでるのです。ですから、お話ししたくなっても、じっとこらえていなければなりません。

あたしは、四週間ちかく学校を休んで、うちでようじょうしました。でも、二月も、三月も、休んだような気がしました。そして、学校のこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とが気になってしかたありませんでした。

あたしは、いっしょうけんめい、よくなろうと、しんぼうしました。いたい注射もがまんしました。にがいおくすりものみました。あごがいたくなるほど大きな口をあけて、なんべんも、なんべんも吸入をしました。そして、やっと、よくなりました。

けれど、病気はあとがだいじだからと、お医者さまがすすめるので、あたたかいところにあるおじさまの家へいって、一週間、休むことになったのです。

列車はすいていました。中はだんぼうで、あついくらいでした。

大きなマスクをしたあたしは、オーバーをぬぎました。となりにすわったおかあさんも、そしてあたしも、あんまり話をしませんでした。ね

ているとき、なるべく話をしないように気をつけていたのが、くせになってしまったのです。

けれど、もう、だいじょうぶです。声をだしても、セキがでるようなことはありません。

「おかあさん。あと、いくつ？」

長いこと乗って、すこしあきてきたので、小さい駅を列車がでたとき、あたしは、おかあさんにききました。

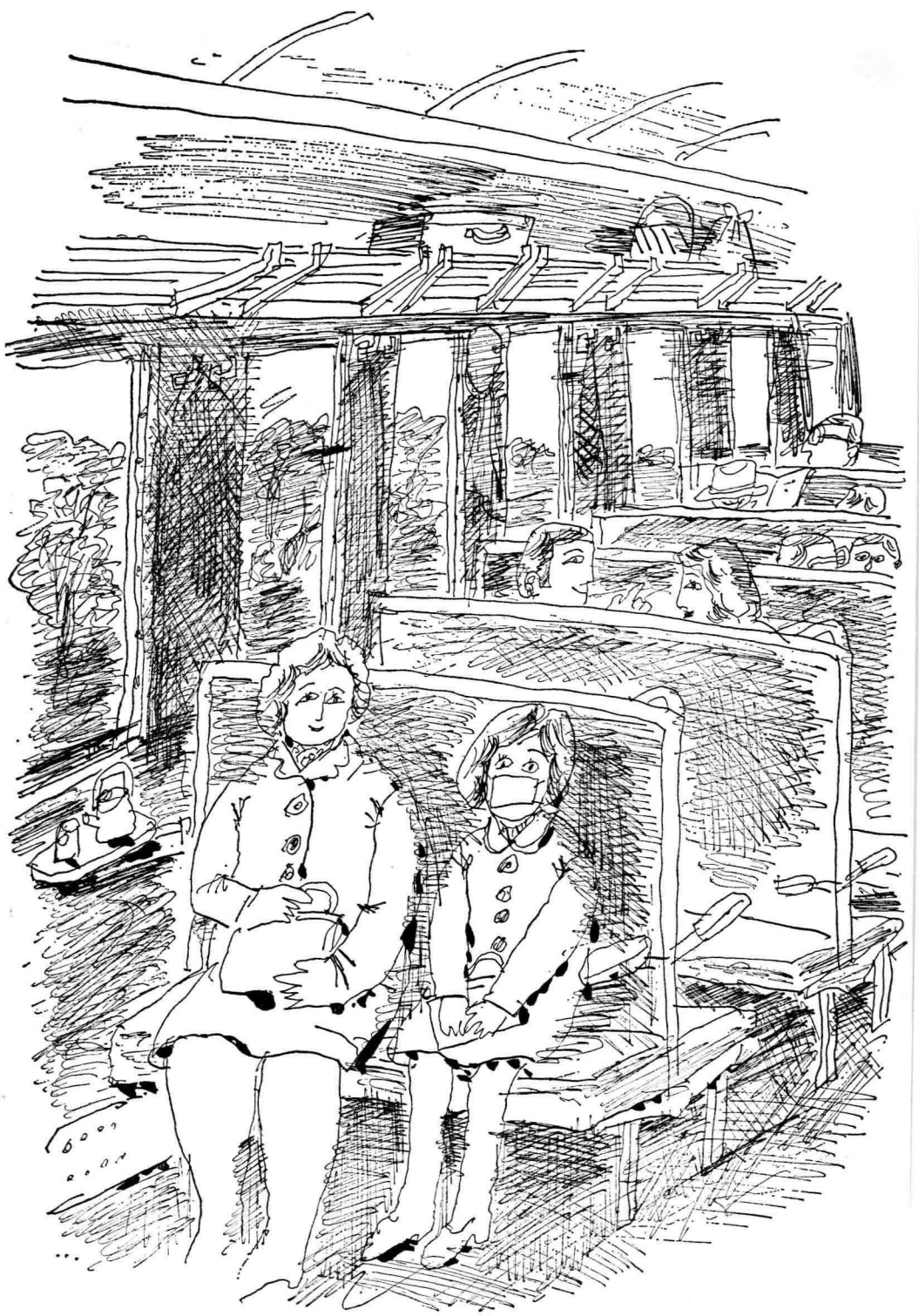
「あとね――。」

おかあさんは、時刻表をひらいていいました。

「三つめ。――もうすぐよ。」

そして、

「どうもない？」



ときながら、ずり落ちそうになったマスクをなおしてくれました。あたしは、大きくうなずきました。

そのとき列車は、またトンネルにはいりました。あたしは、すぐ一つ、二つ、三つ——とかぞえました。

でるまでに、三十二かぞえました。

駅には、おばさまが、むかえにきてくださいました。

「元気そうじゃないの。」

おばさまは、まっさきに、あたしを見ていいました。そして、改札口の外から手をのばして、おかあさんの手から荷物をうけとりました。

「こんでいた？」

「がらあきでした。」

「よかったわねえ。さ、いきましょう。」
あたしたちは、自動車に乗りました。
大型のきれいな車だと思ったら、ハイヤーでした。運転手さんは、まんまるい顔のおじさんで、あたしの大きなマスクを見ると、すぐ、
「病院ですか？」
と、おばさまにききました。
「いいえ。うちへいってちょうだい。」
ぼうしをぬいで、ドアをあけていた運転手さんは、
「はい。」
といって、ドアをしめました。
車がうごきだすと、すぐ、おかあさんは、おばさまにききました。
「おにいさま。お元気？」

「元気よ。あなたのとこは？」
「元気にしています。幹夫さんは？」
「まあねえ――。それよりか、あなた、たいへんだったでしょう？」
あたしの病気のことだと、すぐわかったので、はずかしいから、下をむいていました。
「たいしたことはありませんでした。この子も、わりにおとなしく、しんぼうしましたので――。」
おかあさんは、頭ごしにあたしのかたをだいて、顔をのぞきました。
「よかったわねえ。」
おばさまも、あたしをのぞきこみました。
「でも、すこし元気がなさそうね。」
「そうなんですの。病気になってから、すっかり弱虫になってしまいま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com